

切り裂きジャックのヒーローアカデミア

ほーりーさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

巷を騒がせているヴィラン「切り裂きジャック」と呼ばれる少女、「朧霧華」が雄英高校にスパイとして入り込む話。

とりあえず見切り発車ですので更新頻度はあまり期待しないでください。

追記：作者が構成とか考えているうちにどんどん物語が膨らんで結局Fateとのクロスオーバーとなりました。

目次

一話	切り裂きジャック	1
二話	ヴィラン連合と受験	4
三話	受験という名の潜入調査	7
四話	霧の街の夢	12
	主人公プロフィール公開&おまけエピソード	15
五話	個性把握テスト前編	18
六話	個性把握テスト後編	21

一話 切り裂きジャック

夜の繁華街にサイレンが響き渡る。周辺には何があったと野次馬が集まってきている。

「危ないので近づかないでください」

警察のその一言でさらに人が増えていく。

そんな中、一人逆方向へと歩いていく少女の姿があったが、そんなことを気にする人はだれもいなかった。

「クソッ！また切り裂きジャックの仕業か！」

「今月入ってもう5件目かよ。しかも未だに尻尾も掴めないなんて…」

現場の路地裏には、切り裂きジャックが殺したと思われる喉元を搔っ切られた女性の遺体が転がり、警察は手をあぐねていた。

切り裂きジャックとは、今巷を騒がせている殺人犯だ。被害者である成人している女性達が全員同じ手口で殺され、かつてのロンドンの殺人鬼を彷彿とさせるために「切り裂きジャック」と呼ばれている。

現在警察が事件現場の付近を搜索するが、怪しい人物は見つかるとはなかった。それどころか路地裏の出口周辺にいた人たちに聞いても、そもそも路地裏から出てくる人などいなかったと証言している。

そう、犯人の目撃情報がないのだ。

このことから犯人は、転移系か透明化などの「個性」であると思われる。しかし、これ以上手がかりも何もないまま、夜は更けていくのだった。

翌朝、とある教会に住んでいる少女は食堂で新聞を読んでいた。

新聞の一面には、昨晚の殺人事件が書かれていた。

「切り裂きジャックねえ…」

少女はそう呟くと、机に置いてあるコーヒーを一口飲む。

「あら、もう霧は起きてたのね」

扉が開くと、修道女の女性が部屋に入ってきた。

「シスター、おはよう。今日は早く起きたのでコーヒーが飲みたくて。」

「おはよう霧。ところで神父様を見かけませんが、どこか出掛けたのでしょうか?」

「たしか神父様は昨晚から用事があると出かけていますよ」

「そう、分かりました。では私は朝食を作るので、みんなを起こしに行ってもらっていいかしら?」

「うん、わかった」

シスターにそう言われ、私、おほろきりか 朧霧華は起きていない子供達を起こしに行った。

起きてきたみんなが朝食を取り終え、私は自室で学校の準備をする。

「そういうえば、今日は体育はなかったね」

彼女は思い出したかのようにそう言うと、昨晚手入れをしたナイフを霧へと変え、そのまま学校へと向かった。

「昨晚も街で事件があったので、夜に出歩かないよう気をつけるように」

学校では帰りのホームルームで昨晚の事件での注意喚起が担任より行われ、そのまま下校となった。

私は終わるとともにそのまま教室を後にする。

そして、帰宅する途中担任に言われたことを思い出した。

「進路か、どうしようかな?」

そう。彼女、朧霧華は現在中学三年生である。

しかし、彼女は特に行きたいというような学校がないのだ。

そんなことで悩んでいると、彼女のポケットから携帯の着信音が鳴る。画面には「神父様」と表示されていた。

「神父様? どうかしました?」

『霧華、ちょうど学校が終わったところか?』

「うん、それでどうかしたの?」

『ああ、ちよつと話したいことがあるから夜に礼拝堂に来なさい。あ、

別に怒るわけではないので安心なさい』

「はい、わかりました」

そう言うのと電話が切れた。

「そうだ、あとで神父様に進路のこと相談しよう」

そう考えると、彼女は教会へと駆けて行った。

夕食を終えると子供達に遊んでと言われたが、神父様に呼ばれているといいシスターに子供達を任せた。

そのまま礼拝堂へと向かうと、礼拝堂から声が聞こえる。

「神父様ー、入りますよー」

彼女はそう言うのと扉を開けて中へと入って行った。

「あ？なんだよこのガキ？まさかコイツが切り裂きジャックなのか？」

「死柄木弔、今後仲間になるかもしれない相手にそれは失礼ですよ」

礼拝堂の中では、顔面に手をつけた男と頭が黒い靄で覆われた二人組が座っていた。

「あなた達だれ？」

二話 ヴイラン連合と受験

二話

現在の時間は夜の10時過ぎ。礼拝堂の椅子に座っていた男達が彼女の方を向いて立ち上がった。

「なあ黒霧、ほんとにこんなガキが切り裂きジャックなのか？」

「あの神父の写真ですとこの子のようですが」

黒霧と呼ばれた男がそう言うと、一枚の写真を取り出す。それには、自室で赤く染まっているナイフを手入れしている霧華の姿が写っていた。

「私のこと知ってるのね。それじゃあ……殺さない」と

そう呟くと、いつのまにか彼女の手にあったナイフが顔に手をつけた男の顔へと飛んでいく。

「吊！」

間一髪、黒霧が黒い靄で吊と呼んだ男を守る。

「なんだよ、めっちゃ好戦的じゃん」

「うーん、その靄邪魔。あなたから殺そうかな？」

そう言うと、黒霧へと殺意を向ける。

「そこまで！」

突然声が響くと礼拝堂の灯りがつき、扉には祭服を着た男性が立っていた。

「神父様！」

そう霧華が叫ぶと、すぐさま神父の元へと駆け寄った。

「やっと来たか、遅えぞこのエセ神父が」

「すまん、少し紅茶を入れていてな」

そう言うと手に持ったトレイを礼拝堂の椅子に置くと二人の前にティーカップを置いた。

「さて、まず霧華には二人を紹介しないとな。こちら、黒い靄を纏っているのが黒霧さん。個性はワープゲートだ」

「始めまして、切り裂きジャック」

「は、はい、始めまして。そういえばさっきのナイフどうしました？」
「ああ、それならこちらに。お返ししますね」

そう言うと、黒霧は霧からナイフを取り出し彼女に渡す。

「あ、ありがとうございます…」

そして神父がもう一人の男を指す。

「そしてこちらの方が『ヴィラン連合』のリーダーの死柄木さんは個性は崩壊だ」

「よ、よろしくお願いします」

「…さつきと全然雰囲気違うな」

「あはは…」

死柄木は霧華のを見てそう呟いた。

「さて、ここに霧華を呼んだのは他でもない。私たちは彼等『ヴィラン連合』に協力することにした」

そう神父は告げると、霧華は首を傾けながら尋ねる。

「神父様がそう言うなら私も協力するよ。でも協力して何するの？誰か殺せばいいの？」

「まあまあ、そう慌てない。ここからはお前の進路のことも関わるんだから」

コホン、と神父は咳払いする。

「霧華には、雄英高校のヒーロー科に行ってもらおうと思う」

ヴィラン連合曰く、来年から平和の象徴であるオールマイトが雄英高校の教師になるという情報を入手したために、そのオールマイトを抹殺するために雄英へと行きスパイとして動いてもらうとのこと。

そう説明を受けると死柄木が霧華に話しかける。

「お前もこのヒーロー社会にうんざりしているから殺人なんてしていいんだろ？俺たちはこのヒーロー社会を崩壊させようとしている。お前にもオールマイトを殺す協力をしてもらう」

「ヒーロー社会の崩壊のためのオールマイト抹殺か…私の目的とは違うけどいいよ。だけど、ひとつだけ条件があるよ」

それから、彼女の雄英受験までの特訓が始まった。

もともと殺人鬼として活動をするために神父から対人戦での殺り方、奇襲、暗殺 e t c …、必要な殺^{スキル}し方は一通りマスターしていたために受験のための戦闘以外にもヴィランとしての戦闘のスキルも積まれていく。

そして、特訓の傍での勉強の合間。疲れた時には黒霧に街まで連れてってもらい、いつも通り人を殺し、そのまま黒霧のワープゲートで帰る。

そんな日々を繰り返しより技術が磨かれる中、ついに雄英高校の受験がやってきた。

余談ではあるが、受験までの間に切り裂きジャックに殺された被害者の数は90人を超えていた。

三話 受験という名の潜入調査

霧華は雄英高校の門を見渡す。

今この瞬間にも、彼女のスパイとしての活動は始まっていたのだ。
(正面の門にはカメラが8台、さらに部外者が入ると反応するっていう通称「雄英バリアー」か。あとカメラの死角はあそこ…)
カメラの位置や校舎の外観などを見て、頭の中で簡易的な地図を作る。

これでもし入試に落ちたとしても、雄英の敷地内へと簡単に侵入できる。成果としては、それだけでもなかなかのものであった。

(さて、確か講堂で実技試験の説明だったよね。早めに行って講堂の中も調べとこう)

講堂へと足を進めようとする後ろが何やら騒がしくなる。

なにやらぶっ殺すなどという物騒な単語が聞こえると、それを言っていたと思われる金髪の少年が彼女のことを追い越した。

(ヴィランの私が言うのもあれだけど、どっからどう見てもヴィランだよ…)

そんな彼を眺めながら、彼女も講堂へと向かった。

説明が終わり、受験生全員がバスに乗ってそれぞれの試験会場へと向かう。

バスで向かう中、霧華は試験の説明を思い出す。

説明によると、実技試験は仮想ヴィランという4種類のロボットを倒してポイントを集めるというなんとも簡単な試験らしい。しかし、仮想ヴィランの中には0ポイントのお邪魔ヴィランもいるらしい。まあこれに関しては無視していいだろう。

そんなことを考えていると、バスが試験会場へと到着した。

「なかなか広い場所だね」

試験会場は街一つ丸々模倣したような場所だった。

彼女は準備運動をしながらスタートの合図を待っている。

すると近くでなにやらまたちよつとした言い合いになったようだ。

そちらを見てみると説明会で質問していた堅物そうな少年が、緑でモジャモジャの髪の毛の気弱そうな少年になにやら言っているようだった。そんな様子を見てみると不意にスタートの合図が上がった。

一拍遅れてみんなが走り出す中、緑の子は完全に止まってしまったみたいだった。

彼女はそんな彼に近づいて話しかける。

「君、大丈夫?」

「わ!?えええ、えっと、ぼぼ、僕は大丈夫です…それより、君は?」

「君が緊張して動けなくなっちゃったみたいだから心配だったの。それじゃあ、お互い頑張ろうね!」

彼女はそう言うと、受験生の後を追いかけていった。

それを見ていた少年も自分の頬を軽く叩き、彼女の行く方へと駆けて行った。

「うーん、これくらいなら全然素手で壊せるね」

そう言うとジャンプしてから踵落としを仮想ヴィランの頭に叩き込む。

他の受験生よりも少し遅れてスタートしたにもかかわらず、彼女は現在スタート地点から一番遠い路地へ仮想ヴィランを倒しながらたどり着いていた。

「まだだれも来てないから、狩り放題だね」

彼女は路地にいた3体の仮想ヴィランのすぐ横の壁へ飛び、その壁を思いっきり蹴り仮想ヴィランに向けて飛び蹴りを放つ。そしてその衝撃でさらに次の仮想ヴィランへと飛び同じように蹴りを入れる。

「靴に鉄板仕込んで正解だったみたいだね」

そんなことを呟くと、さらに奥から3ポイントの少し大きい仮想ヴィランが出てきた。

これも同じように飛びつくど今度はいつのまにか手に持っていたナイフを仮想ヴィランの頭に刺しこむ。すると仮想ヴィランが一瞬動きを止め、その隙を突いて頭の上へ跳びまた踵落としを決める。そのまま着地すると仮想ヴィランはその場で倒れた。倒れたヴィラン

から先ほど刺しこんだナイフを回収する。

「これでこの路地は全部かな？えつとこれで：42ポイントくらい？
もう少し稼いだ方がいいかな？」

考えながら路地を出ると突然地面が揺れ出す。

「うわっ、なにになに!？」

すると彼女の前には巨大なロボット、0ポイントのお邪魔ヴィランが現れた。

お邪魔ヴィランが動き出すと近くまで来ていた他の受験生が一斉に逃げ出す。

「まあこんなでかいのに挑もうとするのなんて普通じゃないよね」

彼女もそのまま去ろうとしたが、ふと考える。

恐らくこれを倒せる受験生はほとんどいないだろう。もし今後ヴィラン連合が雄英高校に侵入して戦闘をするときにもしこの仮想ヴィランが出てきてもかなり苦戦するだろう。

ならば今この場での最善策は一つ。

「この仮想ヴィランの戦力を図るのがいいかな？」

そう呟くと崩れた瓦礫やビルの破片などを足場にビルの屋上へと登る。

そのタイミングで、お邪魔ヴィランは霧華の登ったビルに向かって攻撃をした。

それうまく避け、そのまま腕に飛び乗る、顔へ向けて走りながら霧を発生させる。

朧霧華、個性「霧化」!

自身の身体や物を霧状に変化させることが出来る!さらに霧を周りに放出して霧の中を自由に移動することも可能だ!本気を出せば半径5キロ程まで霧を放てるぞ!

霧を発生させながら顔の周辺まで近づくとお邪魔ヴィランの顔の周りに霧を纏わせる。

恐らくこれでメインカメラの機能が機能しなくなり一瞬だけでも

止まるだろう。

その一瞬を突いてメインカメラを破壊しようと近づくが、そこにたどり着くよりも早くお邪魔ヴィランは再び動き始めた。お邪魔ヴィランはそのまま頭を振り下ろし霧からもとに戻った霧華へとぶつけられる。そのまま落とされるがなんとか体勢を整えてビルにぶつかると同時に霧化して無傷で着地する。

「思ってたよりも動きが止まんなかったな。でもあれなら死柄木さんの個性で全然余裕そうだね」

戦闘の反省をしているとお邪魔ヴィランに向かって跳び上がる人影が見える。

それは試験が始まる前に霧華が喋りかけた緑の髪の少年だった。

「スマアアアアアアアッシュ!!!」

少年はそう叫びながらお邪魔ヴィランの顔を思いっきり殴り、そのまま吹っ飛ばした。

「わあ、すっごいパンチ！まるでオールマイトみたいだね」

そんな感想を述べるも、少年の異変に気付く。

その少年は着地する体勢になることもなく、そのまま頭から落ちていった。

「ちよつとこれ不味いかも」

そう呟くとビルから全速力で飛び降り、少年が落ちてくる場所になるべく高く霧を発生させる。そのまま霧を移動してなるべく高いところで彼をキヤッチするが、流石に落下する勢いまでは完全に殺すことができない。なんとかダメージが少なくなるよう着地しようとするが、ギリギリのタイミングで茶髪の少女が板に乗ってこちらに向かって来る。

「間に合え……!」

少女は叫びながら手を伸ばして彼女たちに触れる。すると、一瞬落下の勢いがなくなりそのまま霧華が少年を抱えたまま着地する。

一方、茶髪の少女は板ごと地面へと滑る形で落ちた。そして吐いた。

「しゅーりょー!!」

と、丁度のタイミングで試験終了の合図となった。

霧華は地面に少年を降ろす。よく見ると、少年の右腕と両足の骨はバキバキに折れていた。

「個性の反動かな？」

少年の個性を考えていると少女ももう大丈夫なのか霧華の元へやってきた。

「いやー、かなりギリギリだったけど二人とも大丈夫だった？」

そう言われた瞬間、霧華は一瞬にしてその場から消え去った。

彼女、朧霧華はひとつだけ苦手としていることがあった。

女性を専門に殺している切り裂きジャックは、女性が一番苦手なのである。

四話 霧の街の夢

雄英高校の入試が終わって数日。

私、朧霧華は夢を見ていた。

それは昼間だというのに薄暗く、霧に覆われた大きな街だった。

私はその街の川沿いを歩いていると、私に似た白髪の少女が立っていた。

「久しぶり、私達にならなかつた貴女」

「久しぶりだね、私がならなかつた貴女」

そう、私は彼女にあうのは初めてではない。

彼女の名は『ジャック・ザ・リッパー』かの有名な切り裂きジャックだ。しかし、彼女自身も本当に切り裂きジャックなのか定かではな
いらしい。彼女は生まれることすらも許されなかつた。いわゆる墮
ろされた胎児の悪霊、その集合体なのだ。そんな彼女がどうして切り
裂きジャックなのか。それは私にはわからないし、恐らくさほど重
要なことではないのだろう。

そして、私は彼女達と一つになる魂のうちの一つだった。

そんな彼女と私は、川辺に座っていつものように喋っていた。

「そつちの世界はどうなの？」

「相変わらずだよ。そういえば、こないだ高校の入試を受けて来たよ」

「高校？」

彼女、ジャックは切り裂きジャックが由縁のおかげか、頭の回転は
恐ろしいほどに早い。多分、私の頭の良さというのも多少は彼女から
影響しているのだろう。

しかし、彼女は胎児の悪霊からか、一般教養と呼ぶものがほとんど
なかつた。

そんな彼女に高校がなんなのか、入試がどんな内容だったのか話す
と彼女は目を輝かせながら聞いていた。

「そういえば、もう大丈夫になつたの？」

大丈夫になつたというのは、女性恐怖症のことだ。

「殺すときはもう抵抗もなくなつたけど、やっぱり話したりするのは

まだできないね」

「そつか。でもきつと貴女なら出来るようになるよ。早くお母さんを殺せるといいね」

「うん」

お母さんを殺す。私のことを捨てたお母さんを殺す。そして、私や彼女、ジャックのような子供を増やそうとしている女性を殺す。

それが私、隴霧華が彼女のためにできる、唯一の行為。私が切り裂きジャックとして活動する理由だった。

「私は、これ以上貴女のような子供を増やさないようにする。ただそれだけ」

これが、私の望み。この世界の全ての子供達が幸せにすごせるようになること。ただ、それだけだ。私のような子供がいなくなることで、それだけが私の望みだ。

「うん、やっぱり貴女はそう言うよね。それじゃあ、これを貴女にあげるよ」

そう言うと、彼女は腰に装備していたナイフを私に渡す。

「いいの？」

「うん、貴女に使って欲しいの」

そう言われ、私は彼女の差し出したナイフを受け取る。

「もう今回は時間が来たみたいだけど、多分その使い方はわかるよね」

彼女は最後にそう言うと、世界が真っ黒に染め上げられる。彼女の姿ももう見えない。

私は届くかどうか分からないけれど、静かにありがとうと呟いた。

「ん…、朝？」

目を覚ますと、私は自室のベッドの上に寝ていた。

そして、手には彼女から貰ったナイフが握られていた。

「霧？起きたかしら？」

ナイフを眺めていたら唐突にシスターが入って来たために、咄嗟に

ナイフを霧に変える。

恐らく見られてはいなかっただろう。

「う、うん。もう起きてるよ。それで、どうかしたの?」

「これが雄英高校から届いていたので。恐らく合否通知でしょう。まあ、霧のことだから合格しているとは思いますがね」

そう言うとシスターは私に封筒を渡してきた。

「では、私は朝食の準備をして来ますね。それと、今夜はご馳走ですよ?」

そう言うとシスターは笑顔で部屋を去って行った。

結果からいえば、私は合格していた。

封筒の中に入っていた投影機からオールマイトが出てきたのは驚いたが、考えてみれば私は最初からオールマイトが教師になることは知っていたためにそこまで驚くほどではなかった。

そして、入試の結果だが、筆記試験は何問かケアレスミスがあったが、特に問題なかった。

実技試験ではヴィランポイントが48ポイント、どうやら思っていたよりも多く倒せていたみたいだ。しかし、今回はヴィランポイントだけではなくレスキューポイントと言うものもあつたらしい。私は最後に0ポイントの巨大ヴィランの攻撃を自身に集中させ周りの被害を最小に押さえようとしていたと判断され、レスキューポイントを少なからずもらえたようだ。

レスキューポイント25、ヴィランポイント48。

合計73ポイントで入試順位は3位とのこと。

そして最後にオールマイトにこう言われる。

「来いよ、臃少女。ここが君のヒーローアカデミアだ!」

それを聞いた私は、口を歪ませながら呟く。

「行きますよ、貴方を殺しに…」

主人公プロフィール公開&おまけエピソード

おぼろきりか
朧霧華

身長140cm・体重38kg FGOのジャックより少しだけ

大きい

誕生日不明

出身地不明 (共に捨て子のため)

個性：霧化

自身の体や自分より小さい物を霧状に変化させたり、霧を発生させてその中を自由に動くことができる。

霧は最大半径5kmまで発生させられるが、風などの個性で霧を吹き飛ばされると強制的に元の体に戻される。

他人の体を霧状には出来ない。物を霧状にするには手で触れていないといけないが、ジャックから貰ったナイフは触れずに霧に変えることが出来る。

巷で切り裂きジャックと噂になっている少女。その正体は英霊であるジャックザリツパーになるはずだった魂の一つ。

雄英高校入学時には既に90人以上を殺害しているが、実は彼女の殺害した者たちは全て娼婦のようなふしだらな女性だったり子供を虐待しているような者や前科を持つ者、時には自身の快樂のために女性を襲うような男性もいたりする。

そのことがネットでも噂され、切り裂きジャックを擁護する者も少なからずいる。

生まれた頃から母親から虐待を受け、物心ついた頃に母親から捨てられる。その影響により女性恐怖症へと陥る。ちなみに彼女の父親は、母親が妊娠したという時点で既に逃げていた屑中の屑である。

教会（孤児院）で暮らしているからもあるが彼女自身は子供好き。思想などはアタランテに近く、彼女の望みは「子供たちの幸せ」である。

なお、女の子は大丈夫らしい。

以下よりおまけエピソード

部屋に置いてあるアラームの音で少女は目を醒ました。

本来なら睡眠を必要としない体だが、少女は夢を見ていた。

彼女になるはずだった
少女の友達の女の子に逢う夢を。

ベッドから体を起こすと、部屋ドアからノックの音が響きドアが開いた。

少女は音が聞こえるなりドアへと駆け出していた。

「おかーさん！」

そう叫びながら部屋に入ろうとした少年に抱きついていった。

突然の抱きつきに反応できずに少年はそのまま押し倒されてしま
う。

「おはよう、おかーさん」

「…おはよう、ジャック」

少年、藤丸立香はお腹の上に乗っているジャックと呼んだ少女の頭
を撫でながら返した。

「そういえば昨日は突然寝ちゃってたけど大丈夫？」

食堂で、ジャックと一緒に朝食を食べながら立香は問いかけた。

「うん、大丈夫。友達に会ってきたよ！」

「へえ、夢で友達に会ったのか」

(夢で友達に会うなんて、ジャックも可愛いところあるな)

「その友達、最近高校受験が終わったんだって！」

ジャックの口から高校受験という単語が出てきて思わず吹き出してしまった。

今日もカルデアは平和です。

五話 個性把握テスト前編

合格通知が届いてから数週間が経った。私は今日から雄英高校へと通うことになる。

しかし間違えてはいけない。私が雄英に通うのはあくまで任務のためだ。オールマイトの抹殺、これを忘れてはいけない。

そんなことを考えているうちに、準備が終わる。雄英までは教会の最寄りの駅から大体一時間ほど、それにその最寄りの駅まで行くのに大体30分ほどかかってしまう。教会から駅までの道にバスはないので早く行かなければならない。

私は朝食を取りに食堂へ行くと、シスターが私の分の朝食を作っておいてくれていた。

私は机に置かれたパンと目玉焼き、ウィンナーを食べながら、これから起きる子供たちの朝食を作るシスターと軽い雑談をして学校へと向かった。

電車に揺られて一時間と少し、私は数ヶ月ぶりに雄英高校の前へと来た。

前回来た時とあまり変化もなく、ふたたび監視カメラの位置を目視で確認するがこちらも特に変化ない。

私はそのまま教室へと向かった。教室のドアはやけに大きく、異形型の個性の生徒も入りやすいように作っているのだろうと推測できる。

ドアを抜けると、大体半分くらいの席がもう埋まっていて近くの生徒同士で雑談したりしている。私は教卓の上に書いてある席順を見てから自分の席に座る。私は出席番号6番だったので廊下側から二列目の一番前だ。

席に座ると私は鞆からスマホを取り出して適当なネットニュースを見て時間を潰していた。

余談だがネットニュースのトップには、昨晚切り裂きジャックによって殺害された指名手配中の女性についての記事であった。

しばらくすると教室の入り口が騒がしくなり、担任を名乗る相澤という人が教室に入ってきた。

「早速だが、体操服を着てグラウンドに出ろ」

そう言うときさつきまで先生の入っていた寝袋から取り出した体操服を生徒に渡した。体操服はほんのり暖かった。

体操服を渡された私を含めた女子一同は、相澤先生に連れられて女子更衣室へとやってきた。中に入って私はすぐに着替え始めると、後ろから私へと話しかけてくる女子がいた。

「あー！あなたは入試の時にモジャモジャ君助けていた…」

そこまで言われて私は反射的に後方に跳び彼女と距離を離れた。しかし、飛んだところで一斉に他の女子に凝視される。

反射的に動いてしまったために気づくのが遅くなったが、この時は制服を脱ぎかけの下着姿の状態で動いてたようだった。

私は顔を赤くして、その場で急いで着替えて更衣室を後にした。

グラウンドへ着くと、まだ私以外の生徒は来ていなかった。

「お、臍はもう来たか。ここまで早いとは、なかなか合理的だな」

「合理的といえますか、私がただ逃げただけといえますか…」

そう言うと、相澤先生はなにか思い出した顔をする。

「そういえばお前は書類に女性恐怖症って書いてあったな、気が利かなくてすまん。でも、ヒーローになるためにはちゃんと克服しろよ」

「は、はいー」

そんなことを話していると、他の生徒もやってきた。

全員が揃ったら、改めて相澤先生からの説明が始まった。

今から行うのは「個性把握テスト」。中学時代にやっていた体力測定、その個性あり版だ。デモンストレーションとして入試一位だったという爆豪という生徒に個性ありでソフトボール投げをやらせた。

(あれ？あの人って入試の前に見たヴィラン君じゃん)

そう思っていると彼は思いっきり振りかぶる。

「死ねえっ!!?!!?!!?」

そう叫びながらボールを爆風の勢いで遠くに飛ばす。

みんなの心が（死ね？）となっている中私は（死ねって、やっぱり
ヴィランじゃん）と思っていた。

そして飛んでいった結果、705.2mだった。

それでデモンストレーションは終わって個性把握テストが始まる
と思っていたのだが、結果から言うとな最下位の見込みのない生徒は除
籍処分されることになった。

となったのも、先ほどのヴィラン君（爆豪）の結果を見て「面白そ
う」と言った生徒がいた。

それが相澤先生の逆鱗に触れてしまったのか、そのような条件をつ
けられてしまった。

まあ、あくまで「見込みのない」と判断されたら除籍されるのだろ
う。ならば私は、全力でやるだけの話だ。

「自然災害、大事故、身勝手なヴィラン達、いつ何処から来るか分から
ない厄災、日本は理不尽にまみれているそういう理不尽を覆していく
のがヒーロー。」

放課後マックで談笑したかったならお生憎様。これから三年間、雄
英は全力で君たちに苦難を与え続ける。

“Plus Ultra”さ、全力で乗り越えてこい」

“Plus Ultra”ね。じゃあ、乗り越えさせてもらおうよ。

六話 個性把握テスト後編

50 m 走

ここで個性を使つての移動をしてもいいが、あまり手の内を晒したくない。

ということでは最初の種目は普通に走ろう。そう思っていたら私の番になった。

私は尻尾の生えた男の子と共にスタートラインに立った。スタートと同時に私たちは走り始める。私は普通に走るのに対して、尻尾の生えて男の子は尻尾を器用に使つて前へと飛んでいた。

結果的には男の子に負けてしまったが、記録は6・72秒。普通に走つた割にはいい記録じゃないかな？

握力測定

これは特に個性が意味ないので普通にやる。

結果は、43・26kgだった。

なんか個性を使つてない女子よりも倍近い数値になっているが、これはきつと普段ナイフを握っているから少し握力が強くなったんだろう、うん。

立ち幅跳び

これは少し個性を使つてみよう。

思いつきり跳んでからの着地する瞬間に全身を霧化させる。そして霧化した状態で数十m進んだところで霧化を解除する。

記録は57・83m。

本当はもつと余裕があつたけど注目を避けるために途中で記録を切つた。ほかの生徒は私よりもつと高い記録を出しているし、こんなものでちようどいいだろう。

ちなみに、2回目の測定を個性を使わないで跳んだら7m超えた。まあ路地裏の壁を壁キックで屋上まで行けるし、多少はね？

反復横跳び

これも特に個性の使いどころがないので普通にやろう。

結果、74点。

下手な男子より高かったのはここだけの話。

ソフトボール投げ

これも個性の使いどころがなかったから普通にやった。

結果は34mだった。

だけどソフトボール投げはあのオールマイティみたいなパワーの男の子、先生には緑谷つて呼ばれてたね。緑谷君は1回目で先生に何か言われて周りが心配そうにみていたけど、あの入試の時の超パワーでボールを思いつきり投げ飛ばして70.5. 3mを出していた。

でも指先がまたあの時みたいになバキバキに折れていた。まだ個性のコントロールができていないのかな？でもあの個性はもしかしたら今後の作戦の障害になるかも、注意しないとね。

上体起こし&前屈

これも特に個性はなし。

結果、上体起こしが43回。

前屈が58cmだった。

持久走

最後の持久走も、特に個性は使わなかった。

結果は3位。流石に長距離を走るスクーターには追いつけなかったよ…

そうして、個性把握テストが全て終わった。

結果を言えば、私の結果は7位だった。

「ちなみに除籍は嘘な。君たちの最大限引き出す合理的虚偽」

「「「はあああああ!!!」」」

「あんなの嘘に決まっています、ちよつと考えればわかりますわ」

「なんだー、つまんないのー」

私がそう言うと、みんながギョツとした目で見てきた。

「コホン、とりあえず今日はこれで終わりだ。教室戻ったらカリキュラムなどのプリントがあるから、各自見ておくように。それと緑谷、お前後で保健室ではあさんに治してもらえ」

相澤先生が緑谷君に保健室の利用届を渡すと、そのまま解散となった。

その後、女子更衣室での着替え中にて、先ほどの着替えの時に話しかけてきた茶髪の少女が、また霧華へと話しかけようとする。

「ねえ、さつき…」

「!？」

またも驚いた表情になった彼女は後ろに跳び、そそくさと更衣室を出て行った。

女子たちが教室へと戻る途中、相澤先生に呼び止められる。

「女子は全員いるな」

「先生。隴さん、でしたっけ？彼女だけいませんけど」

「大丈夫だ、その隴について話がある」

そこで、女子たちは初めて隴霧華のことを知った。

それと同時に、更衣室での行動を理解した。

「一応、隴自身にも克服しようと思いはある。時間はかかるかもだが、それを理解した上で接してやってくれ」

それだけ伝えると、そのまま去って行った。

しかし、今日彼女に話しかけようとした少女、麗日お茶子には罪悪感ができた。

(女性が苦手なのに、うちは何も気にせずに話しかけちゃった。悪いことしたなあ)

謝りたいけれど直接は謝れないという葛藤が、彼女の中にできる。

そんな気持ちを抱えながら、彼女は帰路に着く。そんな中、彼女は今日仲良くなった二人を見つける。メガネを掛けた委員長気質な少

年と緑髪でモジヤモジヤの気弱そうな少年だ。彼らを見つけた彼女は、いつのまにか駆け出していった。